愛媛大学教育学部紀要　人文・社会科学　第30巻　第1号　41～54　1997

日本語初級教科書におけるハガの提出順序

杉　本　和　之
（日本語日本事情研究室）

1．はじめに

日本語教育の初級段階とは，一般に日本語の初心者が3か月から6か月，時間にして約300時間をかけて，日本語の基本的な部分を学習する段階である。そして，それに対応する日本語初級教科書はいずれも，日本語の全くの初心者が，できるだけ円滑で効率よく学習し，着実に学力を伸ばしていけるよう，細心の注意をもって作成されている。即ち，文法，語彙，発音，文字表記のそれぞれにおいて各項目が，易から難へ，単純から複雑へ，基本から応用へと段階を踏んで編集・配列されている。この内，文法に関して言えば，一般的には「文型」という概念の下に文法項目が整理され，文型の配列という形で処理されている。文型とは文の構造パターンであり，その文型を形成する主な要素として，まず第一にハとガが挙げられる（即ちハ構文，ガ構文，ハーガ構文）。次はノ，ヲ，ニ，へ，ト，カラ，マデ等の格助詞である。他に主要な要素となるのが文末の述語である。名詞述語，形容詞述語，動詞述語の区別，更にはその否定形，過去形，過去否定形，或いは丁寧体に対する普通体，そして動詞の活用形を使ったアスペクト表現・ムード表現へと分化し，もう一方では様々な接続表現を用いて単文から複文への分岐が見られる。これらは全て原則として文型として分類され，各課に配列される。

ハとガが文型を構成する大きな要素であることは間違いない。日本語文は，省略の文を除いた完全文では，基本的には大別するとハ構文，ガ構文，ハーガ構文の3つに分けられる。そして，3つに分けられた上で，上記の述語の分化形態や種々の格助詞と絡んで多くの文のパターンを形作ることになる。本稿では，ハとガに焦点をあて，ハとガの機能を次節で見るように，合計12に細分類し，それぞれがどのような順序で提示されるかをまず調べ，比較検討する。その上で，その順序が，どのような文法観，文法教育観，日本語教育観を示していることになるのかといった点を考察する。

調査の対象とする日本語初級教科書は代表的なものとして，次の12点を選んだ。発行年月の順に並べると次の通りである。

『BASIC JAPANESE 1，2』大阪外国語大学，全50課，1967年（略称，BJ）
『外国学生用　日本語教科書　初級改訂版』早稲田大学語学教育研究所，全40課，1967年（早稲田）
『日本語初歩』国際交流基金，全34課，1971年（初歩）

『JAPANESE FOR TODAY あたらしい日本語』学習研究社，全30課，1973年（JFT）
『AN INTTRODUCTION TO MODERN JAPANESE』水谷修・水谷信子，ジャパン・タイムズ社，全30課，1977年（IMJ）
『A CORSE IN MODERN JAPANESE 1，2』名古屋大学日本語教育研究グループ，全24課，1983年（CMJ）
『JAPANESE: The Spoken Language 1，2，3』E.H.Jorden, with Mari Noda, 講談社インターナショナル，全30課，1987年（JSL）
『文化初級日本語Ⅰ，Ⅱ』文化外国語専門学校，全36課，1988年（文化）
『初級日本語』東京外国語大学附属日本語学校，全28課，1990年（東外大）
『SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE 1，2，3』筑波ランゲージグループ，凡人社，1992年（SFJ）
『しんにほんごのきそⅠ，Ⅱ』財団法人・海外技術者研修協会，全50課，1993年（きそ）
『長沼　新現代日本語Ⅰ，Ⅱ』財団法人・言語文化研究所東京日本語学校，全45課，1995年（長沼）

なお，先行研究について言えば，日本語初級教科書のハガを分析対象とした論稿は見当たらない。しかし，河原崎・吉川・吉岡(1983)『日本語教科書ガイド』，並びに河原崎・吉川・吉岡(1992)『日本語教材概説』は初級に限定しないで，数多くの日本語教科書及び視聴覚等の副教材を対象にして，その構成と内容について解説を施している。両者とも代表的な日本語初級教科書の文型・文法事項の提出課の一覧表を掲載している。筆者が調査対象として上に挙げた初級教科書12点の内，『早稲田』『IMJ』『JFT』『初歩』『東外大』『文化』はその一覧表の中に収められている。しかし，ハガに限定して言えば，それほど細分化して調査してあるわけではない。

2．ハガの用法分類

ハの用法は大別すると主題の用法と，対比（対比的主題）の用法に分かれる。主題というのは，「XハP。」という文で，「Xハ」の部分がその文で取り上げる主題 topic を表し，「P。」の部分がその主題に関する解説を表すという構造をもった文によって表わされる。具体例を挙げると，以下のようなものである。

(1) 鈴木さんは鈴木建設の社長です。
(2) 鈴木さんの手は白くて細長い。
(3) 鈴木さんは毎週日曜日にゴルフをします。
(4) 僕はカツ丼だ。（＝カツ丼を注文する。）

本稿ではこのようなハの主題の用法を，「ハ－1　主題名詞文」「ハ－2　主題形容詞文」「ハ－3　主題動詞文」「ハ－4　はしょり文」として分類した。「ハ－1」は「N_1 は N_2 です／だ。」の名詞述語文，「ハ－2」は「NはA。」の形容詞述語文，「ハ－3」は「NはV。」の動詞述語文である（N＝Noun ，名詞／ A＝Adjective, 形容詞／ V＝Verb, 動詞）。「ハ－4」も表面的な構造は「N_1 は N_2 です／だ。」で，「ハ－1」と同じであるが，これは本来は動詞述語文ないしは形容詞述語文であるものを省略して，名詞述語文へと変化させたものである。例文(4)を用いて説明すると，(4)の本来の文は，「僕はカツ丼を注文する。」という形の動詞述語文である。その「カ

ツ丼を注文する」という述部を，「カツ丼」という名詞に断定の「だ」を結合させて省略代用させた形になっている。このような「N_1 は N_2 です／だ。」の文を「はしょり文」と呼ぶ。「はしょり文」も又，主題のハ構文の一種である。「はしょり文」の具体例としては，他に「はさみは事務所です（事務所にあります）。」「春は曙（がいい）。」等がある。

対比（対比的主題）の用例としては次のようなものがある。

(5) いいえ，（私は）ウイスキーは飲みません。

(6) フランス語はできますが，英語はできません。

(5)の「ウイスキーは飲みません。」は，「他の飲み物（例えばビール）は飲むが～」といった裏の意味を含んでおり，ウイスキーと他の飲み物との対比が見られる。(6)はフランス語と英語の対比が文面上に明示されている。又，「ウイスキーは」「フランス語は」「英語は」は，文ではそれぞれ主題を形成している。

本稿では(5)のような用法を「ハ－5　対比否定文」，(6)のような用法を「ハ－6　二項対比」と命名した。「ハ－5」は「否定文のハ」とも呼ばれるもので，「Nは」の部分が否定の対象領域となっている（言い換えれば，N以外は否定の対象領域ではない）。

対比の用法としては他にもいろいろ考えられる。

(7) 右手は使えますか。

(8) 銀行へは行きました。

(9) セーターを着ているので，寒くはない。

(10) 一応彼にも知らせはする。

(11) 一度彼女に話してはみた。

(7)のハは「疑問文のハ」であるが，主題のハと紛らわしいので，本稿では取り上げなかった。初級教科書にも時々現れるが，「否定文のハ」と比較すると，文型として意識されるのはかなり少ないようである。(8)は格助詞の後につく対比のハであるが，これも取り立てて一つの文型として意識されるのは少ないようである。初めに「否定文のハ」で「対比」として紹介・説明してしまえば，(7)(8)とも，同種の対比のハとして類推がつくからである。なお，対比のハは(9)(10)(11)のように，微細な単位にまで入り込みうるが，このような用例は，初級の段階ではほとんど紹介されていない。

ガの用法は大別すると，中立主格，排他主格，従属節中の主格（中立主格の一種），形容詞・自動詞の目的格の計4つになる。例文を示すと次のようになる。

(12) 昨日の夜友達が来ました。

(13) これが私のカメラです。

(14) スポーツの中でサッカーが一番面白い。

(15) 母が作った料理を食べてみて下さい。

(16) 私はホンコン映画が好きです。

中立主格は，文を，ハを使って「主題－解説」の二分化した構造で示すのではなく，文全体を一つの新しい情報として提示する際の，主格を表す。排他的性格をもった主格でなく中立的な主格である。(12)や「あっ，財布が落ちている。」「あれ，空が赤いぞ。」のように，事実や現象をありのままに表現する場合に用いられる。述語としては動詞が用いられることが圧倒的に多い。本稿では「ガ－1　中立主格」として取り上げる。

排他主格は⒀⒁のように，他の名詞（句）を排して，一つの名詞（句）のみを独占的に述部と結合させる文に使用される。「新幹線より飛行機の方が速いです。」等もこの用例である。述語としては形容詞が圧倒的に多く用いられ，その場合，⒁や上の例のように，どの教科書も必ず比較を表す文型として扱われている。本稿では⒀のような例は「ガ－2　排他名詞文」，⒁のような用例は「ガ－3　排他・比較」として取り上げる。

従属節中の主格は，「Nは」の形では主節の述語と呼応して従属節の中に収まらなくなるため，従属節中に収めるために「Nは」を主格「Nが」へと降格させる現象である。上の例文⒂では「母が」を「母は」にすると非文法的な文になる。

⒄　みんなが喜ぶように，おいしい料理を作る。

⒅　父が病気になったために，家の仕事を手伝った。

⒆　私が来月国へ帰ることをまだ皆は知らない。

⒇　私が駅に着いた時，電車はもう出ていた。

従属節には，⒄「～ように」⒅「～ために」などの副詞節，⒆⒇などの連体節に分かれる。いずれも，主節の主格を兼ねることのない従属節中の主格は，原則としてNガで表示される。しかし，初級教科書に最も早く現れる従属節，原因・理由の「～から」は，Nハも受け入れる。他の従属節でも，「～ので」等はNハを受け入れる可能性がある。初級教科書でもこの点を考慮してか，従属節中の主格＝Nガ，というような固定的な扱いはしていない。これに対して，連体節の場合は，対比のハという特別な場合（「子供ハ見られない映画」）を除いて，Nハを受け入れない。但し連体節といっても，「～こと／の／時／わけ／つもり／はず」等，いわゆる形式名詞まで含めると「節」という概念からはみ出してしまうおそれがある。このため，本稿では被修飾名詞は，形式名詞の類を除外して，実質名詞のみとし，この用法を「ガ－4　連体節主格」として扱った。なお連体節主格は，時にはNガではなく，Nノで表される場合がある。

㉑　母の作った料理を食べてみて下さい。

形容詞・自動詞の目的格の具体例は次のようなものである。

㉒　兄はオート・レースが好きだ。

㉓　私は新しいパソコンがほしい。

㉔　隆はヘディング・シュートが上手だ。

㉕　生徒には適当な英語の辞書が要る。

㉖　彼女はスペイン語が分かる。

特定の形容詞・自動詞述語が要求するもので，対格のヲに近い用法である。本稿では「ガ－5　目的格」として取り上げた。

ハとガの各々の用法は以上11個であるが，ハガが混交して用いられる，次のような用法もある。

㉗　秀子は目が大きい。

㉘　東京は人口が多い。

㉙　私は足が疲れた。

いづれも「N_1 は N_2 が～」の構造をもち，N_1 ＝全体，N_2 ＝その部分という関係を示している。「N_1 は」それ自体は主題を表すが，文全体としては独特の形態を有しているため，本稿でも「ハガ　総主文」として独立した用法として扱う。なお，「総主文」という名称は，N_1 ＝総主語，N_2 ＝小主語という観点から，命名されたもので，草野清民（1899）によって有名になった。

N_1 ＝総主語という分析は必ずしも妥当とは考えられないが，この種の文に適当な名称がないため，本稿では一応「総主文」という呼称を用いる。

以上，ハガの用法をまとめると，「ハ－１　主題名詞文」「ハ－２　主題形容詞文」「ハ－３　主題動詞文」「ハ－４　はしょり文」「ハ－５　対比否定文」「ハ－６　二項対比」「ガ－１　中立主格」「ガ－２　排他名詞文」「ガ－３　排他・比較」「ガ－４　連体節主格」「ガ－５　目的格」「ハガ　総主文」の合計12の項目に分類されることになる。

３．初級教科書におけるハガの扱い

ではこれから前節で決定したハガの12の用法に従って，日本語初級教科書におけるハガ各用法の提出順序を見ていこう。それぞれの教科書において何らかの特徴があれば，それも記述していくことにする。なお，教科書の日本語文がローマ字で表記されている場合は，適当な漢字仮名混じり文に書き替えることにする。

３－１．『BASIC JAPANESE １，２』（全50課）

１）	ハ－１	主題名詞文	（第１課）	これは新聞です。
２）	ハ－２	主題形容詞文	（第４課）	この机は大きいです。
３）	ハ－３	主題動詞文	（第５課）	私は毎朝６時に起きます。
４）	ガ－１	中立主格	（第７課）	ここに本があります。
５）	ハ－５	対比否定文	（第７課）	いいえ，灰皿はありません。
６）	ハ－６	二項対比	（第７課）	いいえ，犬はいますが，猫はいません。
７）	ハガ	総主文	（第10課）	今日は天気がいいです。
８）	ガ－３	排他・比較	（第18課）	三つのうちでたいようがいちばん大きいです。
９）	ガ－５	目的格	（第19課）	私はくじらが好きです。
10）	ハ－４	はしょり文	（第22課）	日本では，国の政治の中心は国会です。
11）	ガ－２	排他名詞文	（第28課）	これがいちばん古い歴史の本です。
12）	ガ－４	連体節主格	（第35課）	これは私がきのう買ったカメラです。

ハ構文から入るオーソドックスな配列である。複雑で微妙なハとガの使い分けを，学習者が混乱せぬよう，多くの課に少しずつ分散させて，易から難へ要領よく配列している。又，各文法事項には英文による簡潔な説明がついている。「ガ－４　連体節主格」の提出課がやや遅いという印象を受ける外は，無難な配置である。但し「ハ－４　はしょり文」は，偶然読み物の中に入っていたのをピックアップしたもので，教科書の体裁上は文型扱いになっていない。

３－２．早稲田『外国学生用　日本語教科書　初級改訂版』（全40課）

１）	ハ－１	主題名詞文	（第１課）	わたしは山田です。
２）	ハ－２	主題形容詞文	（第３課）	このいぬは大きいです。
３）	ハ－３	主題動詞文	（第５課）	田中さんは勉強します。
４）	ハ－５	対比否定文	（第６課）	ご飯は食べません。
５）	ハ－４	はしょり文	（第８課）	ロッシーさんのイタリアのおうちはどこですか。

6）ガ－1　中立主格　（第9課）　庭にはうめの木があります。
7）ハ－6　二項対比　（第15課）　この町はあつくて，あの町はすずしいです。
8）ガ－5　目的格　（第22課）　写真がとりたいです。
9）ガ－3　排他・比較　（第23課）　ここがいちばんいいです。
10）ハガ　総主文　（第24課）　加藤さんはお父さんが社長です。
11）ガ－4　連体節主格　（第35課）　これから私が勉強する本

最初に二項対比以外のハを全て並べているのが大きな特徴と言える。その分，中立主格ガの登場がやや遅れた観がある。この「ハ－4　はしょり文」の例は文型として特別意識されてはいない。他の教科書にもよく見られるものだが，主題名詞文の一変形ぐらいに考えられているのだろう。なお，「ガ－2　排他名詞文」はこの教科書には登場しない。

3－3.『日本語初歩』（全34課）

1）ハ－1　主題名詞文　（第1課）　わたしははやしです。
2）ガ－1　中立主格　（第3課）　ここにでんわがあります。
3）ハ－5　対比否定文　（第3課）　いいえ，つくえの上には本はありません。
4）ガ－2　排他名詞文　（第4課）　どの人がラタナーさんですか。
5）ハ－3　主題動詞文　（第5課）　あおいりんごは11あります。
6）ハ－2　主題形容詞文　（第6課）　このつくえは大きいです。
7）ガ－5　目的格　（第22課）　わたしはスポーツが好きです。
8）ハ－6　二項対比　（第23課）　読むことはできますが，書くことはあまりじょうずではありません。
9）ハガ　総主文　（第24課）　兄は体が大きいです。
10）ガ－3　排他・比較　（第25課）　動物ではくじらがいちばん大きいです。
11）ガ－4　連体節主格　（第33課）　先生のお書きになった本
12）ハ－4　はしょり文　（第34課）　ジュースはぼくです。

「ハ－1　主題名詞文」から始まっていることから，全般的にはオーソドックスと言えるが，「ガ－2　排他名詞文」が第4課と早々に提出されていることは非常に珍しい。又，前項の『早稲田』と比べると，中立主格ガの登場の早いのも目につく。連体節主格はガでなくノで示されている。

3－4.『JAPANESE FOR TODAY あたらしい日本語』（全30課）

1）ハ－1　主題名詞文　（第1課）　これは花です。
2）ハ－2　主題形容詞文　（第2課）　あの工場は小さいですね。
3）ガ－1　中立主格　（第3課）　このへやにはドアが二つあります。
4）ハ－3　主題動詞文　（第3課）　わたしのつくえはここにあります。
5）ハ－4　はしょり文　（第3課）　課長さんのつくえはどこですか。
6）ハ－6　二項対比　（第9課）　このへんはむかしは静かないい町でしたが，今はすっかり変わりました。

7）ガー3　排他・比較　（第12課）　地下鉄とバスとどちらが便利ですか。
8）ハー5　対比否定文　（第12課）　日本にはチップの習慣はありません。
9）ガー5　目的格　（第13課）　わたしはカメラがほしいです。
10）ガー2　排他名詞文　（第15課）　向こうの山が赤城山です。
11）ハガ　総主文　（第15課）　メアリーは目が大きいです。
12）ガー4　連体節主格　（第24課）　わたしたちが乗る電車はもうすぐ来るでしょう。

配列上はそれほど特徴のないオーソドックスな部類に属する。一応12の用法は全て登場するが，一冊で初級全てをカバーしているため，取り上げて説明したり，練習問題をつけて定着を目指している，いわば本格的な文法事項の数は多くない。5）6）8）10）も本格的な対象にはなっていない。

3－5.『AN INTTRODUCTION TO MODERN JAPANESE』（全30課）

1）ハー4　はしょり文　（第1課）　東京はいま何時ですか。
2）ハー1　主題名詞文　（第2課）　それは七千円です。
3）ガー1　中立主格　（第3課）　あそこに喫茶店がありますね。
4）ハー3　主題動詞文　（第3課）　中村さんたちはどこにいますか。
5）ハー5　対比否定文　（第5課）　でも勉強はあまりしませんでした。
6）ハー6　二項対比　（第6課）　きのうはひまでしたが，きょうはいそがしいです。
7）ハー2　主題形容詞文　（第6課）　今週はあまりいそがしくありません。
8）ガー3　排他・比較　（第11課）　どっちのほうがふるいですか。
9）ハガ　総主文　（第11課）　（奈良の大仏は）たかさが二倍ぐらいあるでしょう。
10）ガー5　目的格　（第12課）　あのう，先生，（私は）予習ができませんでした。
11）ガー4　連体節主格　（第22課）　正夫がほしがっていた本，買ってきてくださった？

この教科書の最大の特徴は，「ハー1　主題名詞文」ではなく，「ハー4　はしょり文」を冒頭にもって来たことにある。主題のハをはしょり文から始めるというのは，他の教科書と比べても異彩を放っている。ハガを文の基本構造に照らして文型扱いし，基本的な文型から順に配列するという従来からの伝統的な考え方を一部破棄していることになる。第2課に主題名詞文を登場させているという事実から，伝統的な教科書作成方針を完全に無視しているわけではないが，新しい考え方が背後にあるものと見られる。それは恐らく，文構造の中で常に述語と論理的な関係を担って使用される格助詞ガと比較して，最も隔たりの大きいはしょり文のハを，最初に配することにより，主題提示としてのハの性格を強調したかったということであろう。本文中には他の教科書に見られるような文型練習は見られず，この教科書の基本的な性格は，文の構造の定着よりも，自然な会話の定着を目指すというところにあると思われる。

他には，連体節主格ガは22課に登場するが，連体節主格ノとしては10課に出ている。又，排他名詞文ガはこの教科書には登場しない。

3－6.『A CORSE IN MODERN JAPANESE 1，2』（全24課）

1）ガー1　中立主格　（第1課）　アリスさんが行きます。
2）ハー5　対比否定文　（第1課）　いいえ，サラダは食べませんでした。

3）ハ－3	主題動詞文	（第1課）	ルインさんは食堂へ行きました。
4）ハ－1	主題名詞文	（第2課）	アリスさんは学生です。
5）ハ－2	主題形容詞文	（第3課）	ルインさんは静かです。
6）ハ－4	はしょり文	（第4課）	私はさかなです。
7）ハガ	総主文	（第5課）	アリスさんは頭が痛いです。
8）ガ－2	排他名詞文	（第6課）	どの人が先生ですか。
9）ガ－5	目的格	（第7課）	いいくつがほしいです。
10）ガ－4	連体節主格	（第11課）	ルインさんが大学で会った先生は佐々木先生です。
11）ガ－3	排他・比較	（第16課）	これの方がそれより安いです。
12）ハ－6	二項対比	（第22課）	……この一年間にサラリーマンの給料は6.8％しか伸びなかったが，税金は17.6％もふえ……

ハとガの多くの文法項目を各課にうまく配分して，複雑で難解だと言われるハとガの使い分けを少しずつ理解させていくというのが，日本語初級教科書の大方の手法であるが，この教科書はそのような漸進的方法を採らず，第1課から，ハとガの本質的な相違点に斬り込んでいる。即ち，英文による詳しい文法説明を設け，その中で動詞文におけるハとガの根本的な機能の差に言及している。通例の初級教科書のように主題名詞文から入れば，ハとガの問題は一応回避できる。名詞文では，「NガNです。」の排他名詞文もあるが，実際に会話場面で使用される頻度はハによる主題名詞文「NハNです。」に比べると非常に小さく，従って第1課でハとガの問題に立ち入る必要性はない。それに反して，動詞文から入ると，ハ構文，ガ構文両方とも同程度の使用頻度が予想され，ハとガの問題に本格的に取り組まざるを得ない。この教科書は冒頭から困難なハとガの問題に敢えて立ち入り，そこから日本語教育を展開しようとしている。その意味では，この『CMJ』はハとガの問題を日本語における最大の問題であると意識して，正面から立ち向かった教科書だと言える。この方法は，詳しい英文による文法説明があって初めて可能となるもので，学生の高い英語能力の存在が一つの前提になっている。学習者の英語能力にあまり期待できず，媒介語をできるだけ排して直接法で授業を進める多くの日本語教育機関では，『CMJ』の使用は難しい。

なお，二項対比は文型として意識されず，第22課で読み物に登場するのみである。第1課の対比否定文のところで対比の詳しい説明があり，二項対比もその中に含まれると考えた結果であろう。

3－7.『JAPANESE: The Spoken Language 1，2，3』（全30課）

1）ハ－5	対比否定文	（第4課）	いいえ，テニスはしません。
2）ハ－4	はしょり文	（第4課）	今日はだれですか。（＝今日はだれが来ますか。）
3）ガ－1	中立主格	（第4課）	新しいのがあります。
4）ガ－2	排他名詞文	（第4課）	これがコンピューターです。
5）ハ－3	主題動詞文	（第4課）	田中さんは来ました。
6）ハ－1	主題名詞文	（第4課）	これはパイです。
7）ハ－2	主題形容詞文	（第4課）	このかさはよくないですね。
8）ハ－6	二項対比	（第4課）	ケーキは高いですけど，パイは高くないです。

9）	ガ－5	目的格	（第5課）	もっと安いのが要りますね。
10）	ガ－3	排他・比較	（第15課）	おはしとフォークと，どちらがいいですか。
11）	ハガ	総主文	（第17課）	あの子供は目が大きいね。
12）	ガ－4	連体節主格	（第19課）	友達があずけたお金

この『JSL』も異色の教科書である。米国人学者の手による米国人学生のための日本語教科書ということも大きな要因になっているのであろう。ハとガは第3課までは登場しない。第1課は「わかりますか。―ええ，わかります。」のような動詞の単独述語文。第2課は名詞の単独述語文，第3課は形容詞の単独述語文である。そして第4課で初めてハとガが登場するが，その第4課でハガの主たる用法は例文つきで一挙に説明されている。もちろん，英文による詳しい解説である。教師，学生の双方向で英語による深い議論ができるという環境が，このような構成を可能ならしめているのであろう。第3課までハとガが登場せず，動詞・名詞・形容詞の単独述語文が配置されているというのは，どのような意味をもっているのだろうか。これは恐らく，日本語では必須の要素は述語であり，現実の場面においても述語のみによる会話が多く用いられている，という観点に基づいているものと思われる。「言語構造」とか「文型」とかいった観念に囚われすぎた結果，「あなたは日本人ですか。―はい，私は日本人です。」のような，現実的に見て，丁寧すぎて不自然な文を提出してしまう危険性を排除しようという考えが働いているのであろう。

排他・比較＝第15課，総主文＝第17課，連体節主格＝第19課となっているが，この内，排他・比較の用法に匹敵する排他の形容詞文「どれがいいですか。」は第4課，連体節主格ノは第5課にと，早い段階で提出されている。

この『JSL』も前述の『CMJ』と同様，名詞文でなく動詞文からスタートしている。但し『CMJ』とは違って，「ルインさんがアリスさんを先生に紹介します。」のような格助詞の頻発する複雑な構造は避け，動詞の単独述語文に絞っている。

『JSL』の課題は，このようにハとガの用法を一挙に提出して，学生が消化し切れるか，或いは消化しうるとしても他の面の学習がおろそかにならないかという問題に尽きる。この点については，恐らく優秀な学生達の集中的な学習という保証があるのであろう。

3－8．『文化初級日本語Ⅰ，Ⅱ』（全37課）

1）	ハ－1	主題名詞文	（第1課）	休みはいつですか。
2）	ハ－2	主題形容詞文	（第4課）	あなたの部屋は広いですか。
3）	ガ－1	中立主格	（第5課）	冷蔵庫の中にビールとおさしみがあります。
4）	ハ－3	主題動詞文	（第5課）	デパートはどこにありますか。
5）	ハ－4	はしょり文	（第5課）	リンさんはどこですか。
6）	ハ－5	対比否定文	（第6課）	うちでは食べません。
7）	ガ－5	目的格	（第6課）	私はロックが好きです。
8）	ハ－6	二項対比	（第10課）	いいえ，新館の部屋は洋室で，旧館の部屋は和室です。
9）	ガ－3	排他・比較	（第15課）	どちらの駅のほうが近いですか。
10）	ハガ	総主文	（第15課）	この部屋は台所が狭いです。
11）	ガ－2	排他名詞文	（第19課）	どの人が佐藤さんですか。

12）ガ－4　連体節主格　　（第21課）　これは私が作ったケーキです。

例文自体は自然で新鮮な印象を与えるが，ハガの配列に関してはオーソドックスな構成になっている。はしょり文「リンさんはどこですか。」は「リンさんはどこにいますか。」との併記という体裁になっている。

3－9.『初級日本語（東外大）』（全28課）

1）ハ－1　主題名詞文　（第1課）　わたしはたなかです。
2）ハ－2　主題形容詞文　（第2課）　あのびょういんはおおきいです。
3）ハ－3　主題動詞文　（第3課）　わたしはざっしをよみます。
4）ガ－1　中立主格　（第6課）　門のそばに池がありますね。
5）ハ－5　対比否定文　（第6課）　いいえ，日本語の本はいっさつもありません。
6）ハ－6　二項対比　（第9課）　日本ごはべんきょうしますが，えいごはべんきょうしません。
7）ガ－4　連体節主格　（第13課）　これは私がかいたえです。
8）ガ－5　目的格　（第14課）　わたしはえをかくことが大好きです。
9）ハガ　総主文　（第18課）　象は鼻が長いです。
10）ガ－3　排他・比較　（第18課）　日本ではふじさんが一番高いです。
11）ガ－2　排他名詞文　（第19課）　こちらがわたしの本です。

第1課から，ハの主題名詞文，主題形容詞文，主題動詞文の順に並べるオーソドックスな配列である。小さいことではあるが，『東外大』で目につくのは，第18課で総主文のパターンを多く出して本格的な定着を図っていることである。他の教科書には見られない特徴だといっていいだろう。なお，「ハ－4　はしょり文」については用例が見当たらなかった。

3－10.『SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE』（全24課）

1）ハ－1　主題名詞文　（第1課）　シャルマさんは学生です。
2）ガ－1　中立主格　（第2課）　シャルマさんが切手を買う。
3）ハ－3　主題動詞文　（第2課）　山下さんは友だちの田中さんといっしょに郵便局へ行きました。
4）ハ－5　対比否定文　（第2課）　いいえ，葉書は買いませんでした。
5）ハ－4　はしょり文　（第3課）　ええと，ぼくは天ぷら定食。
6）ハ－2　主題形容詞文　（第6課）　この荷物は重いです。
7）ガ－5　目的格　（第7課）　お茶が飲みたかったです。
8）ガ－3　排他・比較　（第10課）　このセーターの方が安いです。
9）ハガ　総主文　（第10課）　このセーターは色がいいです。
10）ハ－6　二項対比　（第10課）　チキンは食べますが，ポークは食べません。
11）ガ－2　排他名詞文　＊（第12課）　あの人が小川さんです。
12）ガ－4　連体節主格　（第16課）　あそこの，地下が駐車場になっているビルですよ。

この表だけでは『ＳＦＪ』の特徴が分かりにくい。実は第１課の前に“Introduction to Japanese”という長い英文による解説があり，その中の“Grammar”の項に助詞の説明が掲載されている。そこで“Structure particles”（＝格助詞）としてガ，ヲ，ニ，へ，デ，ト，カラ，マデが挙げられ，ガは主格を表すと記されている。ハはモとともに“Topic particles”（＝提題助詞）として扱われている。例文としては，ガのものはなく，ハは主題動詞文「私は東京へいきます。」が挙げられている。

第１課は伝統的な方法に従って主題名詞文を扱っているが，第２課では早々と動詞文を提出して，中立主格のガと主題動詞文のハを登場させている。文法説明では中立主格ガが主題化されるとハに変わることを分かりやすく図で示している。即ち，主題のハの基底には，基本構造としての中立主格ガがあることをこの第２課の段階で理解させようとしている。この方法は前述した『CMJ』に通じるものである。但し第１課は主題名詞文から入ってガを登場させないなどの工夫が見られる。『SFJ』は各課に詳しい英文の文法説明を掲げ，特に前半部分はハの説明が詳しい。

なお，「ガ－２　排他名詞文」は上の表では12課となっているが，実際は12課の後ろに掲載されている「まとめ３」の「が and は」の説明の項に出て来る例文から拾った。

３－11.『しんにほんごのきそⅠ，Ⅱ』（全50課）

１）	ハ－１	主題名詞文	（第１課）	わたしはラオです。
２）	ハ－３	主題動詞文	（第４課）	わたしは朝６時に起きます。
３）	ハ－２	主題形容詞文	（第８課）	ラオさんは親切です。
４）	ガ－５	目的格	（第９課）	私はりんごが好きです。
５）	ガ－１	中立主格	（第10課）	事務所に田中さんがいます。
６）	ハ－４	はしょり文	（第10課）	はさみはどこですか。
７）	ガ－３	排他・比較	（第12課）	クラスでナロンさんがいちばん若いです。
８）	ハガ	総主文	（第16課）	あの人は髪が長いです。
９）	ガ－４	連体節主格	（第22課）	これはわたしがとった写真です。
10）	ハ－６	二項対比	（第27課）	わたしはひらがなは書けますが，かたかなは書けません。
11）	ハ－５	対比否定文	（第27課）	わたしはひらがなは書けますが，かたかなは書けません。

排他名詞文ガが欠落している，対比否定文が二項対比に含まれる形でのみ用いられているということ以外に，ハガの配列上，一見大した特徴はないように見える。しかしよく注意すると，中立主格ガの前に目的格ガが登場していることがわかる。このような特徴は他の教科書には全く見られない。ガの最も基本的な用法は中立主格ガである。他の全ての教科書は，ガを提出する場合，いずれも中立主格ガを先頭に立てている。『きそ』はどのような意図をもって，目的格ガを先行させたのであろうか。目的格ガの前に提出されているのは，主題名詞文，主題動詞文，主題形容詞文のハである。このことから，ハ構文の基本たる主題用法を優先させて定着させようとしていることが読み取れる。そしてその後に目的格ガが登場するのである。これはハとガの切り離しを狙ったものである。中立主格ガを登場させれば必ずハとガの対立に触れざるを得なくなる。『きそ』は，ガの最初に目的格ガを選ぶことによって，学習者に対して，まずハとガの性格の差異を

意識させたかったのであろう。即ち，日本語文の主流はハ構文であり，ガはハに比べれば小さい単位であると。確かに初級の前半，あるいは冒頭に学習者を混乱させる可能性のある，難解なハとガの使い分けに敢えて言及する必要もないわけである。取り分け，学習者の母語が異なり，共通の媒介語の使用が困難な状況ではこれも適切な手法の一つだと言えよう。但し，ハとガの問題についてはいずれ本格的な説明が必要となる。第10課の存在文のところでハとガの交替について多少触れているが不十分である。第Ⅰ部終了時点あたりでクラス内作業として，本格的な説明をする必要があるだろう。

3－12.『長沼　新現代日本語Ⅰ，Ⅱ』（Ⅰ＝25課，Ⅱ＝20課）

1）	ハ－1	主題名詞文	（第1課）	ソンさんはちゅうごくのかたですか。
2）	ハ－3	主題動詞文	（第2課）	いいえ，わたしはちゅうごくからきました。
3）	ハ－2	主題形容詞文	（第4課）	あのかばんは大きいです。
4）	ガ－1	中立主格	（第6課）	図書館に学生がいます。
5）	ハ－4	はしょり文	（第6課）	ハリスさん，おとうさんとおかあさんはお国ですか。
6）	ハ－5	対比否定文	（第7課）	いいえ，えんぴつはありません。
7）	ハ－6	二項対比	（第8課）	ふうとうはありますが，びんせんはありません。
8）	ガ－5	目的格	（第13課）	ハリスさんはフランス語が上手ですね。
9）	ガ－3	排他・比較	（第14課）	飛行機と新幹線とどっちが速いですか。
10）	ガ－2	排他名詞文	（第15課）	これがその写真です。
11）	ハガ	総主文	（第20課）	オーストラリアは日本と季節が反対ですね。
12）	ガ－4	連体節主格	（Ⅱ－2）	私の住んでいる町には，八百屋……などがあります。

一応全ての用法が網羅されている。ハガの配列についてはオーソドックスな構成になっている。但し総主文は文型として意識されていない。連体節主格はノのみが用いられている。しかしそれに先立つ第17課で，「AのはBです。」の名詞節Aに入るハはガに変えるという説明があり，この「Aの」を連体節主格の代表として扱っているとも考えられる。

4．まとめ

前節の，教科書の分析をまとめて一覧表にしたのが，次頁の表1である。ハガに関する文法項目は，大半が初級教科書の前半に収録されている。逆に言えば，初級教科書を作成する場合，まず最初の課題となるのがハガの取り扱いだということになる。12の教科書の内，主題名詞文から始めているのが9例で圧倒的に多い。『IMJ』『CMJ』『JSL』を除くこの9例は，その意味でハガに関しては一応オーソドックスな教科書といっていいだろう。主題名詞文は「NはNです。」という単純な二極構造で，否定形は「～です。」を「～ではありません。」に変えるだけでよいし，テンスの上でその過去形を問題にすることもあまりない。「NがNです。」のガ構文を同時に扱う必然性もない。又，日本語クラスを開始した時点で，最も相応しい「紹介」という場面・機能に，「私は～です。」「あなたは～ですか。」のような主題名詞文がぴったり適合する。これらの理由で，主題名詞文が初級教科書の冒頭に選好されたのであろう。

ハガに関する文法項目では，この主題名詞文の他には，主題形容詞文，主題動詞文，中立主格

表1．ハとガの提出順序

	BJ (50課)	早稲田 (40課)	初歩 (34課)	JFT (30課)	IMJ (30課)	CMJ (24課)	JSL (30課)	文化 (37課)	東外大 (28課)	SFJ (24課)	きそ (50課)	長沼 (45課)
ハ－1 主題名詞文	1	1	1	1	2	2	4－6	1	1	1	1	1
2 主題形容詞文	4	3	6	2	6－2	3	4－7	4	2	6	8	4
3 主題動詞文	5	5	5	3－2	3－2	1－3	4－5	5－2	3	2－2	4	2
4 はしょり文	22	8	34	3－3	1	4	4－2	5－3		3	10－2	6－2
5 対比否定文	7－2	6	3－2	12－2	5	1－2	4－1	6－1	6－2	2－3	27	7
6 二項対比	7－3	15	23	9	6－1	22	4－8	10	9	10－3	27	8
ガ－1 中立主格	7－1	9	3－1	3－1	3－1	1－1	4－3	5－1	6－1	2－1	10－1	6－1
2 排他名詞文	28		4	15－1		6	4－4	19	19	*12		15
3 排他・比較	18	23	25	12－1	11－1	16	15	15－1	18－2	10－1	12	14
4 連帯節主格	35	35	ノ33	24	22	11	19	21	13	16	22	ノII－2
5 目的格	19	22	22	13	12	7	5	6－2	14	7	9	13
ハガ 総主文	10	24	24	15－2	11－2	5	17	15－2	18－1	10－2	16	20

ガが基本的な要素である。先述した9例中7例は，まず初めに主題名詞文を置き，次にこの3つの要素を並べている。残る2例中『SFJ』は主題形容詞文を少し離して後ろに，『きそ』は中立主格ガを同様の扱いにしている。

教科書によって欠落のある，はしょり文，排他名詞文の用法は初級では，他と比べて一段低く，準必須の要素と見なしていいだろう。

さて，複雑だと言われるハガの文法項目を全体としてどのように扱うか，という根本問題に立ち返ると，前節で紹介したように，大別して二つの方法に分かれる。一つは，多くの教科書が採用しているように，ハガの複雑・難解さを考慮して，学習者の負担にならぬよう，その用法を少しずつ小出しにして，漸進的に進めて行く方法である。この学習者の負担という点に最も配慮しているのが，前述したように，『きそ』の例である。ハガの文法項目の配列に工夫を加えて，初

級初期の段階での混乱を回避しようとしている。反対の例は『CMJ』『JSL』のケースで，ハとガの根本的な問題を敢えて初期の段階で学習者に提示し，英文による詳しい解説を付した上で，難関を一挙に踏破しようとしている。この中でも最も徹底しているのが『JSL』の場合で，第4課でハとガの本質的な問題点をほとんど網羅して学習させている。以上二つの内でも，それぞれに細かく見ていけば更に様々な手法が考えられているが，ハガの文法項目の指導に関して，いずれが適切かという問いに対しては，個々の教育機関の個別的な特徴に依存すると答えるしかない。即ち，各々の機関の学生の質・知的レベル・英語能力・学習期間・最終到達目標，教師の熟練度・英語能力（共通媒介語が英語でない場合もありうる）という特徴に依拠することになる。

以上の教科書の中で，今後初級日本語教科書を作成する際，大きな参考となるのは『SFJ』のケースであろう。本文会話では，省略形を用いた自然な文を重視しつつ，文法説明では日本語文の構造を重視して，ハ，ガ或いはモの説明が非常に詳しい。しかも多くの図を用いて，理解しやすい内容になっている。又，第1課からいきなり難解なハガの問題を提示する『CMJ』のような生硬さがない。惜しむらくは，説明が英文でのみ書かれているという点であろう。この点，『きそ』には数カ国語の文法解説書が分かれて用意されているが，残念ながら，ハガの説明が少ない。

参考文献

（1）国際交流基金編〈河原崎　幹夫，吉川　武時，吉岡　英幸＝執筆〉（1983）　『日本語教科書ガイド』（北星堂書店）

（2）河原崎　幹夫，吉川　武時，吉岡　英幸（1992）　『日本語教材概説』（北星堂書店）

（3）杉本　和之（1984）　「『は』と『が』――話し手（私），聞き手（あなた）の場合」『日本語教育52号』（日本語教育学会）

（4）三上　　章（1972）　『現代語法序説』（くろしお出版）

（5）三上　　章（1960）　『象は鼻が長い』（くろしお出版）

（6）寺村　秀夫（1991）　『日本語のシンタクスと意味　Ⅲ』（くろしお出版）

（7）久野　　暲（1991）　『日本文法研究』（大修館書店）

（8）奥津敬一郎（1978）　『「ボクハウナギダ」の文法』（くろしお出版）

（9）南　不二夫（1974）　『現代日本語の構造』（大修館書店）

（10）草野　清民（1899）　「國語の特有セル語法―總主」『帝國文學　五巻五號』（大修館書店『日本の言語学　第3巻』所収）

（11）斉藤　修一（1986）　「教科書論」『日本語教育59号』（日本語教育学会）

（12）野田　尚史（1986）　「日本語教科書における文型の扱い」『日本語教育59号』（日本語教育学会）

（13）玉村　文郎（1986）　「Japanese for Today について」『日本語教育59号』（日本語教育学会）

（14）川瀬　生郎（1986）　「日本語教科書『日本語初歩』の作成とその問題点」『日本語教育59号』（日本語教育学会）

（1997年4月30日受理）